「子どもの現在(いま)」を特集するにあたって

「子ども未来学研究」編集長　杉　山　直　子

「最近の学生は、ゆとり世代だから……」という声を、大人たちが話すのをよく聞く。その度に、ゆとり政策に入ったのは、昭和52年からであり、なぜ、最近の若者だけがそのように言われるのかと、疑問に思う。若者に「ゆとり世代」という大人の中にも、ゆとり政策で育ってきた人たちもいる。「ゆとり政策」がメディアで取り上げられ、一般の多くの人たちが「ゆとり世代」という目で若者を見る時代は、これまでなかったであろう。また、教育政策に関して、そこで育った子どもたち自身が責任を負わなければならないこともなかったであろう。

また、大学数理科のある教員から、次のような話を聞いた。学生たちは、子どものときから数学が好きで、大学で数理を専攻するに至っている。しかしながら、高等学校で数学Ⅲ、数学Cを履修しなくて大学に入学している者もおり教員としては困るので、入学後に補講をせざるを得ない。しかし、こうした状況は決して本人たちの問題ではない。また、大学での専門的な研究は、個人的に課題と向き合い進めていくのであるが、就職となると“明るく、人間関係に関する能力が必要”と要求されることが多く、大学での学び方、そこから育つ人間性が活かせない。学生たちが、大人の社会の様々な矛盾を突き付けられているようであると言う。

子どもたちは、いつの時代も、社会や時代の特徴をよく知らず、そこで現在(いま)を生きている。そして、育つと若者になる。子どもとは、そういう存在である。その結果、社会や時代の課題を、よく知らずに背負わされている。これまで、大人たちは自分たちもそのように育ってきたので、子どもという存在の「明るさ、強さ」とともに「悲しさ」も含めて、子どもという存在を理解してきた。しかしながら、現在(いま)の子どもたちは、大人たちから一方的に背負わされ、場合によって追求されているのではないかと思われる。子ども時代を懸命に生きてきた大人たちだからこそ、大人になって初めてわかる「子どもという立場」と「子どもの論理」……これらが理解されにくくなってきている感がある。子ども感を大人たちが自分自身に育てていかなくてはならないし、子どもにかかわる専門家はそうした力がより必要である。子どもたちの現在(いま)をいかにとらえ、大人としていかにかかわるのか。こうした課題を、今まで以上に大人たちが意識しなければならない時代なのである。子どもたちは、現在(いま)の大人を大切にし、感じ、考え、学び、他者のことを考えて行動し、育ってきている姿もある。そうした子どもたちに、大人たちは負けてはいられない。

最近、赤ちゃんをベビーカーに乗せた20代の2組の夫婦とレストランで話をする機会を持った。夫婦で仲良く食事をしつつ、「子どもはかわいい」、「3人はほしい」と笑顔で話すその「ゆとり世代」である若者たちに、人間らしい温かさと力強さと明るい未来を感じた。